



Title	ボリビアのオキナワ移住地における言語接触
Author(s)	白岩, 広行; 森田, 耕平; 王子田, 笑子 他
Citation	阪大日本語研究. 2010, 22, p. 11-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

正誤表

各ページ	「2世移民」「3世移民」	→	「2世」「3世」
p.13・24行	「ボリビアには戦前から多くの日本人が移民していたが、」	→	「ボリビアには、主にペルーからの転住として、一定数の日本人が移民していたが、」
p.14・7行	「国際協力事業団 JICA」	→	「国際協力機構 JICA」

p.20・表5の以下の数字

「子ども」の列・「スペイン語」の段	6	→	0
「子ども」の列・「日本語と沖縄方言」の段	0	→	6
「子ども」の列・「沖縄方言とスペイン語」の段	1	→	0
「子ども」の列・「3コード併用」の段	0	→	1

p.21・表6の以下の数字

「子ども」の列・「日本語と沖縄方言」の段	9	→	0
「子ども」の列・「日本語とスペイン語」の段	0	→	9
「子ども」の列・「沖縄方言とスペイン語」の段	1	→	0
「子ども」の列・「3コード併用」の段	0	→	1

ボリビアのオキナワ移住地における言語接触

Language contact in Colonia Okinawa, Bolivia

白岩 広行・森田 耕平・王子田 笑子・工藤 真由美
SHIRAIWA Hiroyuki・MORITA Kohei・
OSHIDA Emiko・KUDO Mayumi

キーワード：ボリビア、オキナワ移住地、沖縄方言、ウチナーヤマトゥグチ、言語接触

要旨

本稿では、南米ボリビアのオキナワ移住地における沖縄系移民のコミュニティを対象とし、日本語、沖縄方言、スペイン語による言語接触のありかたに関する記述を試みた。

オキナワ移住地は戦後の集団移民から成る農村型のコミュニティであり (2.1 節)、1 世では主に日本語と沖縄方言が使用されているが、2 世以下では日本語とスペイン語の併用へと使用コードが変化している (3 節)。

世代を問わず使われているのは「日本語」だが、移住地の「日本語」には標準的な日本語には見られないような特徴が観察される。本稿ではこのうち、アスペクトとシヨッタ形式 (4.1 節)、可能形式 (4.2 節)、否定形式 (4.3 節)、「説明」のモダリティに関わる形式 (4.4 節)、シテカラ (4.5 節) の各形式について分析を加え、移住地の日本語が現在の沖縄のウチナーヤマトゥグチに似た特徴を示す場合があることを述べた。

1. はじめに

日本から遠く離れた南米の大地に数多くの日系人が生活を営んでいるのはよく知られたところだが、沖縄に出自を持つ移民らは、一方では沖縄の言語文化を維持しつつ、他方では本土日本の言語文化に影響を受け、かつ南米現地の言語文化を受容して、本土系移民とは異なるエスニックコミュニティを形成している。本稿は、そのような移民社会の一例としてボリビアのオキナワ移住地の事例を取り上げ、当地における言語接触の様相について、その一端を提示するものである。

本稿の筆者の一人である工藤真由美を中心とした、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」の「言語の接触と混交」班では、2002～2003年にブラジル日系(本土系)移民の、2004～2006年にブラジル沖縄系移民の調査をおこなっている(調査の成

果は工藤ほか2009に詳しい)。本稿のボリビアのオキナワ移住地における報告は、それらブラジルでの一連の調査に続くものである。南米沖繩系移民の各コミュニティは、相互につながりを持っている。本稿で述べる調査が企図されたのは、ブラジルサンパウロの沖繩系移民コミュニティであるビラカロンで調査をおこなった際、その中にボリビアを経由した方々がふくまれていたのが直接のきっかけである。

2.1節で詳述するが、本稿で対象とするボリビアのオキナワ移住地は、戦後の集団移民という点で特徴づけられるコミュニティである。移住地はボリビアの平野部に位置しており、沖繩系移民の多くが大規模農場の経営をおこなっている。この地の沖繩系移民については、文化人類学的、社会学的な観点からは記述が進んでいるが(糟谷1999、国本1999、東北大学文学部心理学研究室編1998; 2000、森・大橋1996など)、言語的な側面に関する報告は、管見のかぎり、本稿が初めてのものと思われる。

本稿の記述は、言語使用のありかたを大づかみにとらえる調査票式の「言語生活調査」と、自然談話を収録する「談話録音調査」の2種の調査結果をもとにしている。以下、2節ではフィールドの性格と両調査の概要を述べ、3節では「言語生活調査」の結果を中心として、各世代の話者の使用する日本語・沖繩方言¹⁾・スペイン語の3つの言語コード(「言語」と「方言」が交じるため、本稿では適宜「コード」という用語を使う)について俯瞰的に示す。そのうえで、4節では、彼らの使用する「日本語」に見られる標準的な日本語とは異なる特徴を個別的に取り上げて論じ、最後の5節で今後の展望について述べる。

なお、日本語・沖繩方言・スペイン語という3つの言語コードが接触する移住地での言語調査、およびその正確な分析には難しい問題がある。そのため、本稿の記述は、移住地の言語接触状況の、あくまで一端を示すものにすぎないということを、あらかじめ断っておきたい。特に、3つのコードが入り交じる談話の文字化は困難をとまなうものであり、今回用意した文字化資料だけでは、その実態を記述するに十分な量とは言いがたい。4節で示す言語的な特徴も、極めて限られたデータにもとづく提示にとどまることを先に記しておく。

2. 調査の概要

当地においては、言語使用のありかたを大づかみに見るための「言語生活調査」と、実際の言語使用をつぶさに観察するための「談話録音調査」の2とおりの調査をおこなった。これは、工藤を中心としてこれまでにおこなってきた、ブラジルでの日系・沖繩系移民調査(工藤ほか2009など参照)の手法に沿ったものである。以下、本節では、まず調査地の

性格について示したのち、この2とおりの調査について、それぞれ概要を示す。

2.1. 調査地概要

ボリビアの国土は、ラパスをふくむ南西部をアンデス山脈が貫き、北東部はアマゾン上流の平野が広がっている。オキナワ移住地は、平野部に位置しており、平野部の中核都市サンタクルスから北東約40～90kmの地点にある3つの集落（第1・第2・第3移住地）から成る。このうち、本調査では、移住地全体の中心である第1移住地の住民の方々を対象にした。ボリビアというとアンデスの高地帯が知られるが、平野部の当地は熱帯のサバンナ気候帯に属しており、雨季（夏）と乾季（冬）の区別が明確な比較的暑い地域である。



図1 ボリビアの位置



図2 オキナワ移住地の位置

以下、オキナワ移住地の概要について、コロニア・オキナワ入植40周年記念誌編纂委員会編（1995）、コロニア・オキナワ入植50周年記念誌編纂委員会編（2005）などを参考に簡潔にまとめておく。

ボリビアには戦前から多くの日本人が移民していたが、オキナワ移住地建設の契機となったのは第二次大戦での沖縄の戦災である。1948年、在ボリビアの沖縄系移民有志により「沖縄戦災救援会」が発足、当時米軍統治下の沖縄でも移住政策が検討されており、ボリビア政府の許可、琉球政府による募集を経て1954年に第1次移民が入植した。彼らの移住目的は、ボリビアに定住して農地を切り開くというものだった。このときの入植地は「うるま植民地」と呼ばれたが、伝染病の発生などによってこの土地は放棄され、次の「パロメティーヤ移住地」を経て、1956年に現在の「オキナワ第1移住地」を開く。その後、琉球政府による計画移民は1964年まで19次にわたっておこなわれ、678世帯3229人が入植した。また、移住者の増加にともない「オキナワ第2・第3移住地」が形成された。現在の

移住地の沖縄系移民コミュニティは、ほとんど彼らとその子孫によって形成されている。

開拓当初、彼らに割り当てられた土地は世帯ごとに50haであったが、原始林のような土地が多く、耕作は容易ではなかった。移住から10年ほどの間に約3分の2の移住者が移住地を離れることになり、彼らの土地を買い取って広大な農地を有することになった残りの移住者が移住地に定着した（移住地を離れた移住者は、近隣のサンタクルスやブラジル、アルゼンチン、ペルーへ転住、あるいは沖縄へ帰国したものが多い）。沖縄返還に先立って1967年には日本の海外移住事業団（現・国際協力事業団JICA）の管轄下に置かれることになり、日本政府や沖縄県からの援助を受けつつ、80年代からは日本への出稼ぎなども始まった。その後、90年代には大型機械による大規模農業が定着し、現在にいたる。

現在の移住地では大規模農場の経営者が多く、現地のボリビア人を雇用して大豆・小麦・とうもろこし・稲などの耕作、牛を中心とした畜産をおこなっている。特に大豆や小麦の生産量はボリビア全体の5～6%を占めており、穀倉地帯として知られている。また、移住地には被雇用者であるボリビア人が1万人ほど住んでいるが、沖縄系移民との間で、居住する地区や通学する学校などはおおよそ区別されている。

現在の移住地において、言語接触に関わることからとしては、まず、移住地内外のボリビア人と接触する際のスペイン語使用が考えられる。特に、沖縄系移民の大多数の子弟は、中学卒業後は高度な教育を受けるため都市部に下宿して高校・大学に通うが、そこでは主にスペイン語が使われる。また、農場主として、被雇用者のボリビア人に仕事の指示を出すときにもスペイン語が使われる。ボリビア国内ではスペイン語が上位言語であり、メディアや学校教育などではスペイン語が使われている。

一方、沖縄系移民の子弟が通う移住地内の小中学校では、スペイン語と日本語による授業がほぼ半々の割合でおこなわれている。また、「言語生活調査」の結果によれば、2世以下であっても半数以上は日本への出稼ぎ経験を持っている。出稼ぎ先としては、神奈川県を中心として関東地方が多く、数年から、長い場合は十数年を出稼ぎ先で過ごし、そこで日本国内の日本語と接触する。このほか、移住地内にはJICAの派遣職員など日本国内出身者も居住している。また、NHKの海外放送が受信可能であり、民放の番組もDVDで出回っている。若い世代ではインターネットで日本語にふれる例も見られる。

2.2. 言語生活調査について

言語生活調査は、2007年7月24日～29日（現地時間）に、サンパウロ大学森幸一教授を中心に、移住地内のオキナワ日本ボリビア協会の協力のもと、第1移住地内在住の女性7名の調査員により実施された。また同年8月23日～26日の談話録音調査(2.3節参照)

の際に、補充および追加の調査をおこなった。

方法としては、調査票を使用した面接調査の形をとった。調査票は、ボリビアでの調査に先立っておこなったブラジル日系・沖縄系移民の言語生活調査でを使用したもの（工藤ほか2009など参照）を適宜修正して作成した。

内容としては、1) 個人的社会的属性、2) 言語生活史、3) 家庭での言語使用、4) メディア・娯楽と言語使用、5) 職場・地域社会での言語使用、6) 日本語能力・方言能力・スペイン語能力の自己評価、7) 日本語・方言教育についての意識、8) 訪日（デカセギ）経験と言語意識、9) 移住地の言語・方言をめぐる意識の各項目について、選択式または自由記述式の設問計72項目を用意した。

調査対象者については、オキナワ日本ボリビア協会の会員で第1移住地に籍を持つ539名のうち、対象外とした251名（15歳未満の会員、移住地外へ転居した会員、日本へ出稼ぎ・研修に行っている最中の会員、日系人と結婚して加入したボリビア人配偶者など）をのぞく288名の中から計116名を抽出した。このうち回収できた調査票数は、追加調査分もふくめ総計107名分である（内訳は表1のとおり）。

表1 言語生活調査票回収数

	男	女	合計
1世	15	22	37
2世	31	27	58
3世	6	6	12
合計	52	55	107

2.3. 談話録音調査について

2.3.1. 現地での録音について

談話録音調査は、2007年8月23日～26日（現地時間）にオキナワ日本ボリビア協会の協力のもと実施した²⁾。談話録音にあたっては、対象者の世代、移民時期、性別、年齢、使用コードなどを考慮に入れ、以下のように談話場面を設定した。

まず、すべての話者について、①調査員とのフォーマルな談話と②現地の知人（沖縄系移民の知人）とのインフォーマルな談話の両方を収録した。これは、調査員との談話で各話者のフォーマルなスタイルを、知人どうしの談話で日常の自然なスタイルを引き出すことを目的としたものである。

このうち、本稿で対象にするのは②現地の知人どうしの談話である。これら知人どうしの談話については、会話の相手を基本的に同性の知人としたうえで、移民時期、年齢、使

用コードを考慮に入れ、以下のように下位タイプを設定した。

- 1) 1世では、(a) 成人移民（14歳以上で渡航した移民）と (b) 子供移民（13歳以下で渡航した移民）を分け、(a) 成人移民では同世代の成人移民との談話を設定し、ペアごとに (A) 日本語中心、(B) 沖縄方言中心の2パターンで話してもらうよう依頼した。(b) 子供移民では (A) 同じ子供移民どうしの談話、(B) 成人移民との談話となるよう2パターンのペアを設定した。使用コードの指定は特に設けていない。
 - 2) 2世では、年齢により (a) 中年話者（30～40代）と (b) 青年話者（20代）を分け、それぞれに (A) 2世の同年代の話者との談話、(B) 1世の話者との談話となるよう2パターンのペアを設定した。いずれも使用コードの指定は特に設けていない。
 - 3) 3世では、同じ3世との談話のみを設定した。日本語の分析を主眼とするため、スペイン語ではなく、できるだけ日本語を使用するようにあらかじめ依頼した。
- 以上の基準によって設定した談話のタイプをまとめたものが表2である。

表2 録音した談話のタイプ

①調査員とのフォーマルな談話（本稿の対象外）			
②知人どうしの インフォーマルな 談話	1世	(a) 成人 移民	(A) 同性の1世成人移民との 日本語中心の談話 ----- (B) 同性の1世成人移民との 沖縄方言中心の談話
		(b) 子供 移民	(A) 同性の1世子供移民との談話 ----- (B) 同性の1世成人移民との談話
	2世	(a) 中年	(A) 同性の2世中年話者との談話 ----- (B) 同性の1世話者との談話
		(b) 青年	(A) 同性の2世青年話者との談話 ----- (B) 同性の1世話者との談話
	3世		同性の3世話者との談話

調査対象者は、以上の基準をふまえ、7月下旬におこなわれた言語生活調査（2.2節参照）の回答をもとに選定した。最終的に収録できた談話は計35本だが、そのうち、文字化をほどこし、本稿で対象とするものは、知人どうしで日本語を中心的に使用している6本の談話である。この6本の談話については以下で詳しくその特徴を述べる。

2.3.2. 文字化について

文字化にあたっては、以下の手順で文字化をおこなう談話および箇所を決定した。

- 1) 録音した全談話について、談話の内容、使用コード、音質などをチェックしたうえで、

内容がある程度まとまっており、音質が良好で、文字化に適切な箇所を選定した。

2) 各世代1ペアを目安に、1) で選定した箇所から最終的に文字化する箇所を決定した。

表3 文字化した談話について

談話	話者	世代*	生年	性別	出身地	渡航年	職業
【1**】	A	1成	1930	男	名護市	1954	農業(退職)
	B	1成	1931	男	北谷町	1961	農業(退職)
【2】	C	1子	1958	女	金武町	1959	農業
	D	1子	1959	女	読谷町	1961	農業
【3】	E	2	1983	男	オキナワ移住地		団体職員
	F	1成	1949	男	読谷村	1979	農業、協会会長
【4】	E	2	1983	男	オキナワ移住地		団体職員
	G	2	1978	男	オキナワ移住地		農業、飲食店
【5】	H	3	1990	女	オキナワ移住地		学生
	I	3	1986	女	オキナワ移住地		教師
【6】	J	3	1991	男	神奈川県***		学生
	K	3	1986	男	オキナワ移住地		学生

*「1成」「1子」は、それぞれ「1世成人移民」「1世子供移民」を指す。

**この談話のみ、調査者同席のうえで談話収録。同席者は森田、仲間、工藤（文字化資料中ではそれぞれ森、仲、工と示す）。

***秦野市。両親のデカセギ先で出生（2歳でオキナワ移住地に帰る）。

以上の談話は、日本語を基調にしつつ、沖縄方言やスペイン語が交じったものであったため、複数で分担して文字化作業をおこなった。また、移住地独特の表現など、不明な点が多かったため、白岩が2009年3月に現地におもむき、話者にフォローアップ³⁾をおこない、文字化が正確であるかどうかの確認をおこなった。

なお、文字化の規則については、原則として、ブラジル日系・沖縄系移民の調査結果をまとめた工藤ほか(2009)にしたがった。個人名等は単に「人名」として伏せ字にしている。

2.3.3. 分析対象とする談話の特徴

以下、本稿で分析の対象とする6本の談話について、その特徴を簡単にまとめる（各談話での使用コードについては、3.2節も参照）。

談話【1】は1世成人移民の協力者A・Bを対象にしたもので、15分30秒分のデータを文字化した。話題は、移住当時の苦勞から現在の発展にいたるまでの体験談である。入植時期の早かったAが調査者を意識しつつ発話し、Bがそれに補足して発話をするようなパターンで談話が進んでいる（調査者はなるべく傍観者に徹したが、実際にはいくぶん意識さ

れてしまったためか、丁寧体で発話をおこなうこともあった)。日本語で話すよう依頼したため、使用コードはほとんど日本語であった。

談話【2】は1世子供移民の協力者C・Dを対象にしたもので、13分50秒分のデータを文字化した。話者は2人とも1歳でボリビアに渡航している。共通の知人・友人に関する身近な話題が多く、日本語を中心としつつ、沖縄方言やスペイン語が交じる。普通体による談話である。

談話【3】は2世の協力者Eと1世(成人)の協力者Fを対象にしたもので、21分45秒分のデータを文字化した。話者Eについては【4】として同年代の話者との談話を収録しており、これと比較する目的で、年代が上の話者Fとの談話を収録したものである。EはFに対して丁寧体で発話をおこない、Fは普通体で発話をおこなっている。話題は自分たちの使っている言葉に関するもので、Fの発話量が多く、それに対してEがあいづちなどを返すパターンで談話が進んでいる。使用コードはほとんど日本語である。

談話【4】は2世の協力者E・Fを対象にしたもので、23分55秒分のデータを文字化した。話題は身近な出来事や農業に関する話、大学で書いた卒業論文の話などで、発話量は互いに同程度である。少々の年齢差はあるが、普通体による談話である。日本語基調の部分とスペイン語基調の部分が交互にあらわれる。また、沖縄方言もときおり交じる。

談話【5】は3世の協力者H・Iを対象にしたもので、13分59秒分のデータを文字化した。Hが教師として勤めており、Iも生徒として通っていた移住地の小中学校の話を中心に、身近な人物に関する話題が多い。若干の年齢差があり、Hの発話量が多いが、互いに友人どうしであり、普通体による談話が展開されている。あらかじめ、なるべく日本語で話すよう依頼したが、日本語を基調としつつスペイン語での単語や発話がときどき交じる。

談話【6】は3世の協力者J・Kを対象にしたもので、9分54秒分のデータを文字化した。音楽や移住地内の身近な出来事について語っている。発話量は互いに同程度で、若干の年齢差はあるが、普通体で談話が進んでいる。あらかじめ、なるべく日本語で話すよう依頼したが、日本語基調とスペイン語基調の部分が両方あられ、日本語基調の場合には、スペイン語の単語や文が頻繁に交じる。

3. 各コードの使用状況について

本節では、日本語・沖縄方言・スペイン語の各コードが、それぞれどのような状況で使用されているかについて俯瞰的な記述をおこなう。まずは、大づかみな把握をするため「言語生活調査」の結果について主なものを示す(3.1節)。また、そのような傾向をふまえて、

文字化資料中で確認される各コードの使用のありかたを見る（3.2節）。

次の4節が移住地の日本語の具体的な言語項目を分析するものであるのに対し、本節の記述は、そもそも日本語がどのような状況で使われるのかを示すものである。

3.1. 言語生活調査の結果概要

ここでは言語生活調査の結果のうち、言語生活の概要をつかむために必要な項目いくつかについて、その結果を提示する。具体的には、まず、移住当初に日本語と沖縄方言が主に用いられていたことを確認したのち（3.1.1節）、現在の使用コードを世代別に提示する（3.1.2節）。そのうえで、話者の言語能力に関する自己評価（3.1.3節）についても示す。

3.1.1. 移住当初の使用コード

表4は、日本語・沖縄方言・スペイン語のそれぞれを移住当初に使用していたか、以下のような設問で1世の協力者計37名を対象に尋ねたものである（なお、以下に挙げる各設問の設問番号は調査票のまま）。

17-A) あなたは移住した当初、日本語を使いましたか？

1. はい 2. いいえ

（同様の質問を、沖縄方言、スペイン語についても実施）

表4 1世移民が移住当初日本語／沖縄方言／スペイン語を使ったか

	日本語	沖縄方言	スペイン語
はい	29	26	18
いいえ	3	3	7
無回答	5	8	12

質問の対象は1世全体であり、渡航時すでに成人だった話者（1世成人移民）も幼少時に渡航した話者（1世子供移民）もふくまれる。この表からは、彼らが移民当初に話していたことばが主に日本語と沖縄方言であったことが示されている。この質問には、「どんなときに日本語／方言を使ったか」という自由解答欄も設けたが、日本語・沖縄方言ともに「家族」「友人」などと「日常的」に使っていたという回答が目立つ。一方、スペイン語を使用していたと答える話者は、37人中18人いるが、使用の場面が仕事関係にかぎられている。

3. 1. 2. 現在の使用コード

現在の使用コードについては、家庭内の場合と（沖縄系の）友人間の場合として、次のような設問に関する調査結果を世代別に示す（設問28については、表に示す家族の各成員について、使用するコードを10とおりの選択肢から選ぶようにした）。

28) あなたは家族の方にたいして、どのようなことばで話しかけますか？

1. 日本語のみ / 2. 方言のみ / 3. スペイン語のみ
4. 主に日本語 / 5. 主に方言 / 6. 主にスペイン語
7. 日本語と方言がまざる / 8. 日本語とスペイン語がまざる
9. 方言とスペイン語がまざる / 10. 3つのことばがまざる

夫／妻	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	婿／嫁	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
子供	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	兄弟姉妹	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
孫	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	祖父	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
父	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	祖母	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
母	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	その他 ()	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

47-C) 沖縄系の日系人のともだちとはどのようなことばを使って話しますか？
 (使用コードに関する選択肢は上記28)と同じ)

表5 1 世成人移民の使用コード（話す相手別の集計）

	同世代		下の世代	
	配偶者	友人	子ども	孫
沖縄方言*	6	5	2	1
日本語	5	4	13	14
スペイン語	0	0	6	0
日本語と沖縄方言	7	13	0	2
日本語とスペイン語	1	0	0	0
沖縄方言とスペイン語	0	0	1	0
3コード併用	0	1	0	0
無回答など**	4	0	1	6

該当する回答者が5人以上の場合、まとまった傾向として見やすいよう、太字で示す。

(この注については、以下の表6～8も同様)

*「沖縄方言のみ」「主に沖縄方言」という回答をまとめて「沖縄方言」とする。他のコードについても同じ。

**該当する家族がない場合をふくむ。

表5は、1世成人移民の協力者23名についての結果である（この世代では、現在同居する家族がほぼ配偶者・子ども・孫に限られたため、家庭内については配偶者・子ども・孫についてのみ結果を示す。他の世代についても、該当する家族がいる場合の多いものについてのみ結果を示す。また、以下の議論での理解の便のため、各コードの並べ順は沖縄方言、日本語、スペイン語の順にしている）。この表5で示すとおり、1世成人移民は、同世代である配偶者や友人とは沖縄方言か日本語、あるいは両方の併用で会話することが多い。しかし、子どもや孫など下の世代に対しては日本語の使用が中心となるようである。

言語形成を移住地内でおこなった1世子供移民の場合も、表6のとおり、母数が12人と少ないためにおおよその傾向としてしか示せないものの、沖縄方言と日本語の使用が中心で、話す相手の世代が上であるほど沖縄方言、下であるほど日本語の使用が増えるようである。

表6 1世子供移民の使用コード（話す相手別の集計）

	上の世代		同世代			下の世代
	父親	母親	兄弟	配偶者	友人	子ども
沖縄方言	5	9	3	2	3	0
日本語	1	2	2	1	0	3
スペイン語	0	0	1	1	1	0
日本語と沖縄方言	1	0	1	2	2	9
日本語とスペイン語	0	0	0	2	1	0
沖縄方言とスペイン語	0	0	0	0	0	1
3コード併用	0	0	0	3	4	0
無回答など*	7	3	7	3	3	1

一方、表7・8に示すとおり、2世・3世では、1世にあたる世代（2世にとっての父母、3世にとっての祖父母）に対しては（沖縄方言をまじえるケースをふくめて）日本語を中心とした言語使用をするものの、それより下の世代に対しては日本語とスペイン語の併用というケースが目立つ。

以上、1世では日本語と沖縄方言を中心とした言語使用がなされているものの、2世以下では日本語とスペイン語の併用へと、使用コードの変化が認められる。3世でも日本語はよく維持されているが、沖縄方言は次第に使用されなくなり、スペイン語の使用が増えているようである。

表7 2世移民の使用コード（話す相手別の集計）

	上の世代		同世代			下の世代
	父親	母親	兄弟	配偶者	友人	子ども
沖縄方言	1	1	0	0	2	0
日本語	16	24	7	8	8	11
スペイン語	1	1	7	10	8	7
日本語と沖縄方言	9	11	0	1	1	0
日本語とスペイン語	4	6	20	16	29	23
沖縄方言とスペイン語	0	0	0	0	1	0
3コード併用	3	3	6	7	7	4
無回答など*	24	12	18	16	2	13

表8 3世移民の使用コード（話す相手別の集計）

	上の世代				同世代	
	祖父	祖母	父親	母親	兄弟	友人
沖縄方言	0	0	0	0	0	0
日本語	6	7	6	5	1	3
スペイン語	0	0	0	0	0	0
日本語と沖縄方言	0	0	0	0	0	0
日本語とスペイン語	0	0	6	7	8	8
沖縄方言とスペイン語	0	0	0	0	0	0
3コード併用	1	1	0	0	0	0
無回答など*	5	4	0	0	3	1

3.1.3. 言語能力に対する自己評価

言語能力に対する自己評価としては、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能について、「仕事の話」「あいさつやかんなことば」など、さまざまな場面での使用・理解能力を問うたが、ここでは、最も端的な例として「日常の会話」に関する「話す」能力の自己評価を示す。

51) (日常の会話について) あなたはどのくらい日本語が話せますか？

1. よく話せる / 2. だいたい話せる / 3. 少ししか話せない / 4. まったく話せない
(同様の質問を「方言」「スペイン語」についても実施)

表9 「日常の会話」で沖縄方言／日本語／スペイン語を話せるか

	1世成人				1世子供				2世				3世			
	よく話せる	だいたい話せる	少ししか話せない	まったく話せない	よく話せる	だいたい話せる	少ししか話せない	まったく話せない	よく話せる	だいたい話せる	少ししか話せない	まったく話せない	よく話せる	だいたい話せる	少ししか話せない	まったく話せない
沖縄方言	19	2	1	1	12	2	0	0	10	8	22	14	0	0	2	10
日本語	20	3	0	0	13	1	0	0	30	25	1	1	9	3	0	0
スペイン語	0	9	8	4	10	3	0	0	44	10	2	0	10	1	1	0

もっとも回答数の多かったものを太字で示す。

上の表9に示すのはあくまで自己評価ではあるが、中段に示す日本語の使用能力はどの世代においても維持されている（と本人に意識されている）ことがわかる。一方、沖縄方言は、1世はおおよそ「よく話せる」ものの、2世以下では話せない話者が多くなっている。これに対し、スペイン語は、1世成人移民では全体として「話せない」とする内省が多いものの、言語習得の途中でボリビアに移住した1世子供移民、およびそれ以下の世代では、ほとんどの話者がスペイン語を「話せる」と内省している。

3.1.4. 言語生活調査に関するまとめ

以上、3.1節では、言語生活調査の結果について概略を示した。1世では、移住当初から一貫して、日本語・沖縄方言中心の言語使用がなされているといえる。これに対し、2世以下では日本語とスペイン語の併用というケースが増えているようである。また、言語能力に対する自己評価もそれに応じた世代差を示している。

日本語がかなり維持されていることの背景には、移住後半世紀ほどしか経っていないこと、このコミュニティが農村型の性格を有しており、都市に住む場合と比べて日常的なスペイン語使用の場面が限られることなどが挙げられる。なお、同じ沖縄系移民であっても、戦前移民が中心の都市型コミュニティであるブラジルサンパウロのビラカロンでは、3世の段階でポルトガル語へのモノリンガル化が進んでおり、日本語の使用が極端に少なくなっていることが、同様の調査から確認されている（白岩2008）。

3.2. 文字化資料に見る各コードの使用状況

3.1節では言語使用のありかたをアンケート式の調査から大づかみに把握した。ここで

は、そのような傾向をふまえつつ、各文字化資料での使用コードについて簡単に確認をおこない、4節での具体的な分析へとつなげる。

以下、文字化した談話のうち同世代間のものに着目して、使用コードの確認をする。

(a) 1世成人移民

1世成人移民は、沖縄方言と日本語について、両コードともある程度の運用能力を持ち、切り替えもできることが見込まれたため、使用コードを使い分けるよう依頼し、1組で2とおりの談話（沖縄方言の談話と日本語の談話）を収録した。

そのうち、沖縄方言による談話は、依頼どおり沖縄方言が中心的に用いられており、日本語はほぼ使用されない⁴⁾。また、日本語による談話も、沖縄方言が交じることは少なく、依頼どおり日本語中心の談話になっている。

ただし、どちらの談話についても、ボリビア特有の事物を表す語彙にかぎってはスペイン語の使用が見られる。下記は日本語中心の談話の例だが、(1)の“sur”は南半球の冷たい「南風」であり、日本語の「南風」とは性格を異にする。(2)の“machete”も当地風の農作業用具で、日本で一般的な「鉞」とは違うものである。

(1) B: あっちはまだ、あの一、ん、雨もあまりないですね。あの、sur《南風》で、あの一、何か、乾くのが、(A: 大変) 大変でした。

(2) A: 当時の一、仕事のやり方、machete《鉞》で、あの一、鉞ですね。(工: んー) それから斧。それだけです。農具は。最初はね。

以上、1世成人移民の談話の特徴をまとめると、語彙的なレベルでスペイン語の使用が見られるほかは、(切り替えようと明確に意識すれば) 沖縄方言の場合も日本語の場合も、ほぼ他のコードが交じることなく話すことができるといえる。

(b) 1世子供移民

1世子供移民の協力者には、特に使用コードを決めず「普段どおり」に話すよう依頼した。(3)に見られるように、中心的に用いられるのは日本語だが、沖縄方言も節・文単位で頻繁にあらわれる。一方、スペイン語はボリビア特有の事物を表す語彙のほか、数詞や感動詞にも使われるが、やはり使用は語彙的なレベルにとどまっている。

(3) D: もうほっといてもあんまりわからんよ。ただ、あの、学校から ヤーカイ
インジ《家に行って》、ジヌン ネーニルアグトゥ《お金がないんだからと》、

学校から…… {笑い} (C: {笑い}) それだけしかしないし。【Cへのフォローアップによると、お金がないから学校と家の行き来だけで遊ぶことができないとのこと】

C: そうだよ。貧乏学生だからね。

D: フーチャ 《いやはや (Cへのフォローアップによるとスペイン語の感動詞だが、つづりは不明とのこと。ボリビアの方言か)》、ジン マンドーヌ ガクセーターンデー スグ 《お金のある学生達と言ったらほぼ》、uno peso 《1ペソ》 ナー 《ずつ》、dos peso 《2ペソ》 ナーチ 《ずつって》、あの一、ムッチ克蘭シガ 《持って来ないけど》、cinco peso dies peso 《5ペソ10ペソ》 ナー 《ずつ》、ムッチョーン 《持っている》。

(c) 2世移民

2世の場合も、特に使用コードは決めずに「普段どおり」に話すよう依頼した。談話データを見ると、日本語中心の会話の中にもスペイン語が頻繁にあらわれる。文レベルで使用されることもあり、(4) のようにほとんどスペイン語だけで会話が進む箇所もある。

(4) (大学の卒業論文の話)

G: Qué tiempo 《期間は?》 (E: えっ?) Qué tiempo vos vas a estar haciendo tu seguimiento? 《君の研究期間は?》

E: もう終わったよ。だから、もう書いている時。

G: Eh, no perdón, qué tiempo eh, hiciste vos el seguimiento... obtención de datos 《えっ、ごめん、君、研究期間どれぐらい…記録に》

E: えー、5ヶ月。(G: あー) Cinco 《五》

一方、沖縄方言の使用は部分的であり、使用された場合でも、伝統的なものとは異なる形が見られる。(5) の例の場合、伝統的には「アキサミヨー」という形の感動詞が「アーサヨー」という形で使われていると思われる。

(5) (オートバイで事故を起こしたときの話)

G: アーサヨー 【「アキサミヨー」の変形で《あれまー》という感動詞】。(B: デージデージ 《大変大変》)ほんとにそう、あー迷惑だったよあれ。

(d) 3世移民

3世の協力者に対しては、スペイン語の使用が多くなることが予想されたため、日本語の特徴を調べる目的から、なるべく日本語で話すよう依頼した。しかし、JとKによる談話ではスペイン語の使用もかなり頻繁に見られ、全体的には日本語とスペイン語がほぼ同程度の割合で使用されていた。両コードが盛んに入り交じった例として下の(6)を挙げる。

(6) K: 何ギター持ってるの? (J: ん?) 何ギター持ってるの?

J: んー、アコースティック。

K: Acústica? 《アコースティック?》 (J: ん。) Guitarra acústica o acústica no más? 《アコースティックギター、それともただのアコースティック?》。

J: んー Como el que tiene 「人名」 《「人名」が持っているのと同じ》。

一方、HとIの談話では、依頼どおり、ほぼ日本語が使われていたが、語彙レベルでスペイン語の使用も見られた。

(7) (DVDの貸し借りの話)

I: あるよ、けっこう貸したよ、えー、uno 《一つ》だけでも今持ってるはず。「おつむてんてんクリニック」…

H: どういうの入ってる?

I: あのねー何だっけ、あの一、dos 《二人》おじさんの話、一人が精神科医で、もう一人が精神病患者で、(OB: うん。) あの一、医者か、なんか vacaciones 《バケーション》に行くから患者を診れないつつたら、患者が追いかけてって。comedia 《コメディ》。

どちらの談話も、少なくとも文字化した部分には沖縄方言の使用は見られなかった。

以上、文字化資料中の使用コードについて、簡単な確認をおこなった。次の4節では、このような実態をふまえつつ、文字化資料中の日本語部分に注目した分析をおこなう。

4. 文字化資料中の日本語に関する分析

3節では、どのコードを使用するかという観点から、移住地における言語使用のありかたを大づかみに把握した。本節では、そのような言語使用の実態をふまえつつ、世代を問わず使われている当地の日本語の特徴について、文字化資料の用例をもとに、具体的な言

語項目を挙げつつ分析を加える。

あらかじめその概要を示しておく、移住地の日本語は、現在の沖縄中若年層話者によって話されているウチナーヤマトウグチと似た特徴を持ちつつ、項目によっては、標準的な日本語の形式も併用されている。ここでは、そのうち、アスペクトとシヨッタ形式（4.1節）、可能形式（4.2節）、否定形式（4.3節）、「説明」のモダリティに関わる形式（4.4節）、シテカラ（4.5節）について述べる。

4.1. アスペクトとシヨッタ形式

アスペクトとそれに関連する形式については、以下のことが指摘できる。

- 1) 人の存在を表す存在動詞はイルのみが使われている。
- 2) 存在動詞に対応して有標のアスペクト形式としては基本的にシテル形式が使われている。
- 3) そのほか、目撃性や過去の反復習慣を表すシヨッタ形式が使われている。

高江洲（1994; 2004）や永田（1996）によれば、ウチナーヤマトウグチでも、有標のアスペクト形式としてシテルが用いられるほか、目撃性や過去の反復習慣を表すシヨッタが用いられることが指摘されている。この点で、本文字化資料の日本語にはウチナーヤマトウグチとの共通性が認められる。以下、それぞれについて用例を挙げながら確認する。

4.1.1. 存在動詞

いずれの世代でも、人の存在の表現にはイルが用いられており（25例）、オルは使用されていない。このような使用のありかたについて、1世成人移民の談話における、非過去・肯定・普通体の用例を代表として挙げる。

- (8) A: だから50町歩だけじゃ生活できないってブラジルに飛び出すし、郷里に帰る人がいるし、アルゼンチン行く人がいるし、そして残った人は、この、隣の土地を買うとか、譲り受けて、(後略) [1世成人]

4.1.2. アスペクト

次に、各談話で使用されている有標のアスペクト形式について見る。存在動詞イルの一貫した使用と平行して、いずれの世代でもほとんどの場合にシテル形式が用いられている。イルの場合と同様、非過去・肯定・普通体の用例を挙げる。

- (9) F: だから、今度逆に言ったら、ここに、ここで育った2世3世たちは、あの

一日本語である、弁論大会しなさいとか作文書きなさいって言ったら、あの一、とってもきれいな弁論とか作文は書けないかしらんけども、でも、ウチナーンチュ《沖縄の人》の心とかさ、日本人の心は、覚えてる日本語のなかに十分持ってると思うよ。 [1世成人]

このほか、シトルの用例も見られたものの、用例数はごくわずかで、シテルが86例であるのに対し、シトルは5例であった⁵⁾。

4.1.3. シヨッタ形式

以上、標準的な日本語と同じ形式について取り上げたが、このほか、移住地の日本語に特徴的な形式としてシヨッタ形式がある。シヨッタ形式は、形式面でいうと、動詞の第一中止形に存在動詞オルを接続したシヨルの過去形と考えられる。ただし、シヨッタ形式は使用されても、非過去形のシヨル形式は使用されていないということに留意しておく必要がある。

ここでは、このシヨッタ形式について、本文字化資料中の例を挙げつつ分析する。シヨッタの用例は計9例見られたが、どの用例も1) 1回的な事態の目撃(話し手の直接的な知覚)を表現する場合、2) 過去の反復習慣的な事態を表す場合、のいずれかに用いられている。オルが使用されないのに、過去形にかぎってシヨッタという形式が使用されるという点はウチナーヤマトウグチと同様の特徴である。

4.1.3.1. 目撃性を表す場合

ここでは、話者が直接目撃した事態をシヨッタ形式で表す例を挙げる。

(10) D: 運動会の日もね、大学の先生が来てたんだよ。(C: わ、うんど…【「運動会」の言いさし】)で、「人名」はあれで誘われて {笑い} (C: あー) 一人でもう、カンニャーダ《沼の名前》に行きよったけど。 [1世子供]

(11) I: 「人名」がね、「人名」が、(H: うん。) 聞かないわけよ、言うこと。(H: うん。) 1年生だから、「人名 (I自身の名前)」あんまり、(H: うん。) あれなんだけど、日直とかチューレー《朝礼》の時とか、たん、たんすって、あの一、本棚の後ろとかに隠れるわけ、もう、ひっぽっても出てこないから、(H: うん。) 1回ぎゅって押したわけ、そしたら急いで出て来よった。 [3世]

(10) は、移住地を大学の先生がたびたび訪問しては、現地の青年たちと出かけることに

ついて述べている文脈だが、「運動会の日」で青年たちが忙しかったために先生が一人で沼に行ったということを、Dが直接見た事態としてシヨッタを用いて話している。また、(11)は、学校の先生であるIが手のかかる生徒たちについて話している文脈だが、あるとき、生徒（「人名」と伏せ字にした人物）が言うことを聞かず、本棚の後ろに隠れていたのを引っぱるのではなく押したところ、あわてて出てきたという、自らの体験談をシヨッタを用いて話している。

高江洲（1994; 2004）によれば、ウチナーヤマトウグチの場合、目撃性のシヨッタの主語に1人称は用いられないが、本文字化資料にも1人称主語の例はなかった（ただし、もともとシヨッタの例がわずかであるためにこのような結果となった可能性もある）。

4. 1. 3. 2. 過去の反復習慣的な事態を表す場合

次に、過去の反復習慣的な事態を表す場合について述べる。上で述べた目撃性のシヨッタには人称制限があるが、反復習慣的な動作を表す場合は、1人称主語であってもシヨッタが使われている。この点でも、移住地のシヨッタにはウチナーヤマトウグチと同様の特徴（高江洲2004参照）が見られる。

このような過去の反復習慣については、シヨッタ形式とシテタ形式の両方が用いられている。以下、まずシヨッタ形式の例を挙げる。

(12) A: こういうふうにして、結局、何ていいますか、米の収穫には現地人を使って、この、穂積み【ほつみ】ですね。（森：はい）穂、穂だけを、こう、積んで、（仲：んー）それで収穫しよったんです。 [シヨッタ：1世成人]

(13) B: で、あの一、夏あの一、機械がある方は、やっぱしあの一、機械でそういうことするんですがね、人力【じんりょく】でやったんですよ。自分たちは。（仲：へー）あ一、で、何か、あの一、たくさんは一できなかつたんですよね。4、5町歩ぐらい、（工：んー）あの一、草生【お】えるようですとね、あの一、消毒しよったんです。 [シヨッタ：1世成人]

これは、1世成人移民が昔の農作業を振り返る文脈だが、その文脈で、当時の農作業という反復習慣的な動作にシヨッタが使われている。これと同じ文脈でシテタ形式も用いられている。

(14) A: 私はいつも、これは何とかできないかと思って一、綿会社【わたぐわいしゃ】が少し種を分けてですね、自分で試作してたんです。半町歩。ねー。 [シテタ：1世成人]

4. 1. 4. アスペクト・シヨッタ形式に関するまとめ

本節では、アスペクトおよびシヨッタ形式の使用実態について述べた。存在動詞としてはイルが一貫して用いられており、有標のアスペクト形式についても少数の例外をのぞいてシテルが使用されている。これは標準日本語と共通した特徴であり、これまでの報告を見るかぎり、ウチナーヤマトウグチとも共通の特徴といえる。

しかし、このほかに、移住地の日本語には目撃性および過去の反復習慣的事態を表すシヨッタ形式が見られる。用例数が少ないため、断言はできないが、文字化資料を見るかぎりにはウチナーヤマトウグチのシヨッタ形式と同様の特徴を持つといえる。

4. 2. 可能形式

高江州 (1994) によると、ウチナーヤマトウグチでは、条件可能に「かかれる (書かれる)」⁶⁾「おきられる (起きられる)」「こられる (来られる)」という形が、能力可能に「かききれる」「おききれる」「きーきれる」といった形が用いられる。

本文字化資料の可能形式に着目してみると、基本的に、五段動詞で「使える」などの可能動詞の形が、一段・カ変動詞では「みれる (見れる)」「これる (来れる)」などのら抜き可能形式が、サ変動詞では (～) デキルの形が使われている⁷⁾。五段で可能動詞、一段およびカ変でら抜きの可能形式のみが用いられ、「かかれる (書かれる)」「こられる (来られる)」のような形が見られないのは、高江洲の記述するウチナーヤマトウグチの体系とは異なる点である。

一方、可能形式の全86例中4例のみと少数ではあるものの、ウチナーヤマトウグチに特徴的なシキレルという形式も本文字化資料中に見られた。ただし、あらわれた用例は、シキレン・シキレナイといった否定の形のみで、肯定の形は見られない (可能形式全体でいうと、肯定と否定の用例数はほぼ半々であり、出現が否定にかたよるわけではない)。用例数がわずかであるため、はっきりとは判断できないが、ウチナーヤマトウグチのように能力可能専用の形式というわけではなく、(16) の「買いきれん」のように条件可能でも使われるようである。

以下、用例数が少ないために分析は難しいが、シキレルの用例を列挙しておく。

(15) (方向音痴な友人の話題)

D: (前略) ドゥー ウビョーサーンレ 《自分で覚えきれないものでね》、あの、電車なんかも、(C: んー) 乗りきれん 【乗ることができない】って。ほんと、「人名」ターヤ アリアンバイ 《「人名」たちはあれなんだよ》。(C: んー)

あんじゃ、やっぱり…

[1世子供]

(16) (学生時代、お金がなくて買い物に不自由したという話)

D: (前略) (C: んー) 買いきれん【発音は「くわいきれん」: 買えない】わけ。

自分たち、uno peso 《1ペソ》ナー《ほど》持ってっても、買いきれんわけさ。「uno peso 《1ペソ》で何買えるかねー」とか思ってからさ。|笑い|「これを買えるのあるかねー」とおも…【「思っ」のいいさし】 [1世子供]

(17) F: あのこないだNHKであのー日本語による外国人のあの弁論大会ってやってたけどさ、すごくうまいよね。(E: うーん) 外国人がこれだけ、まーだ2、3年とか4、5年しかないけども、もうほとんど外国人とは思えないような日本語を使って弁論大会で (E: へー)、あの、発表するけど、でも、やっぱり日本に長らく住んでいないとさ、やっぱその言葉はさ、気持ちとしては使いきれないと思うよ。 [1世成人]

4.3. 否定形式

高江洲 (1994) によれば、ウチナーヤマトウグチでは、標準語とは異なりシナイではなくセンの形が中心的に使用されることが指摘されているが、移住地の日本語では、シナイが多く用いられ、センは限られた場合にのみ併用されている。本節では、このシナイ・センの使い分けのありかたについて分析をおこなう (なお、丁寧体の発話は量が少なかったため、シマセンなどの丁寧体は対象外とし、普通体の場合のみを分析の対象とする。また、形容詞や名詞では標準的な日本語と同様にシナイの形のみが用いられているので、動詞のみを分析対象とする)。

4.3.1. 量的分布

表10は動詞の活用 (五段/非五段) ごとに否定形式の出現数を集計したものである。

表10 シナイ・センの量的分布 (カッコ内は異なり語数)

	五段動詞	非五段動詞	計
シナイ	43 (17)	53 (25)	96 (42)
セン	29 (14)	0 (0)	29 (14)

可能形式のシキレナイ、シキレン (4.2節参照) は集計からのぞく。

量的な分布から観察されることは、以下の点である。

- 1) 全体的にセンよりもシナイの使用頻度のほうが高い。
- 2) シナイは五段動詞・非五段動詞の両方で用いられており、非五段動詞はすべてシナイの例である。
- 3) センは、五段動詞のみに用いられ、非五段動詞では用いられない。ただし、表10には示さないが、可能形式のシキレンという例が3例見られる（シキレンナイは1例）。

なお、五段動詞の場合にはシナイとセンの両方が用いられているが、それぞれの用例数を示すと下の表11のようになる。表に見るとおり、同じ動詞がシナイ・センのどちらの形式をとる場合もある（「わかる」「聞く」などの例）。

表11 五段動詞の否定におけるシナイ・センの分布

	のべ用例数	動詞ごとの異なり語数とその一覧 (カッコ内は各動詞におけるシナイ／センののべ用例数)	
		シナイ	セン
シナイ	43	17	わかる(18)、会う(3)、行く(3)、聞く(3)、要る(2)、帰る(2)、なる(2)、敬う(1)、終わる(1)、気づく(1)、好む(1)、逆らう(1)、知る(1)、使う(1)、取る(1)、読む(1)、やる(1)
セン	29	14	わかる(13)、開く(2)、知る(2)、治る(2)、焦る(1)、言う(1)、思う(1)、書き直す(1) 聞く(1)、気づく(1)、使う(1)、間に合う(1)、やる(1)、読む(1)

以下、それぞれについて、実際の用例を挙げて確認する。

4.3.2. シナイ

量的分布で確認したように、シナイ形式は活用の種類に関わらず使用されている。

- (18) D: できるときにやらないとね。(C: うん) 年にとって、【婦人会の旅行に】行け
なくなるしね。 [五段動詞・一段動詞: 1 世子供]
- (19) H: (前略) いつものあの、何て言うの、costumbre 《習慣》で、あっ、来る！あー、
来ないやーみたいな… [カ変動詞: 3 世]

シナイという非過去形のほか、下のように過去形も見られる。また、(18)の「行けなくなる」のように中止形が「なる」とくみあわさった例も見られた。

- (20) G: オートバイとかがアッカシ 《動かなく》なってよ {笑い}、おもしろかった、
 あれ。(E: あー) だから驚いたのよ、だから、ほんとに、んー、地面にい

るの気づかなかった。

[五段動詞：2世]

4.3.3. セン

センの出現数はシナイに比べて少なく、また動詞のタイプも五段動詞の場合に限られるが、1世から3世にいたるまで世代に関わらず使用されている。以下、それぞれについて用例を挙げる。

- (21) A: わしら細かいところ分からんけど、(仲: んー) なんとかして、今現在の、組合になって、咳 こう、やってるわけです。 [五段動詞: 1世成人]
- (22) I: まあね、そう、でも、あんたたちの場合は私たちと一緒にじゃなかったら諦めてたからね、「人名」だからまあいいや、田の笑い もういいよ、治らん治らん、これは… [五段動詞: 3世]

また、センカッタのような過去形も見られた。

- (23) J: ま、yo 《俺》が選ばれたと思わんかったから。田の笑い 最初誰から聞いたかね、「人名」先生【沖縄県からの派遣教師】からだった… [五段動詞: 3世]

五段動詞のほかに、語彙的なものとして可能形式のシキレンの例も見られたが、具体的な用例は4.2節の(15)(16)を参照されたい。

4.3.4. 否定形式の使用に関するまとめ

本節では、動詞の否定形式について、1) シナイは使用頻度が高く、動詞のタイプにも制限がなく、中心的に使用されていること、2) センはシナイと比較すると使用頻度が低く、可能形式シキレンの形をのぞくと五段動詞に使用が限られることを述べた。つまり、五段動詞においてのみ、シナイとセンの両形式が併用されていることになる。

ウチナーヤマトウグチとの比較でいうと、シナイとセンの両形式が併用される点は共通している。しかし、ウチナーヤマトウグチでセンが中心的に用いられているのに対し(高江洲1994、永田1996)、移住地ではシナイのほうが中心的でセンの使用が限られるという点が異なる⁸⁾。

4.4. 「説明」のモダリティ

今回収録した談話データには、いわゆる「説明」のモダリティに関わる形式としてノ(ダ)(221例)のほかにワケ(69例)が多数用いられている。特にワケは、これまでワケ(ダ)

の基本的な意味として標準語研究で指摘されている「論理的帰結」(寺村1984)や「論理的必然性」(野田2002など)を示すことなく、語りの文脈のなかで、相手に情報を提示する場合に頻繁に用いられる。

- (24) I: コウジがね、コウジが、(H: うん。) 聞かないわけよ、言うこと。(H: うん。) 1年生だから、「人名 (I自身の名前)」あんまり、(H: うん。) あれなんだけど、日直とかチューレー《朝礼》の時とか、たん、たんすって、あの一、本棚の後ろとかに隠れるわけ、もう、ひっぱっても出てこないから、(H: うん。) 1回ぎゅって押したわけ、そしたら急いで出て来よった。 [3世]

本節では、このようなワケの特徴について、類義表現のノ(ダ)と対比しつつ、簡単にまとめることにする。なお、十分な記述の蓄積があるとはいえないものの、ウチナーヤマトグチでもノ(ダ)相当のワケが使用されることが高江洲(1994)、永田(1996:71-72)などで指摘されているため、確認可能な範囲で比較をおこなうことにする。また、分析にあたっては、ンダのように「ノ」が撥音として実現した例もノ(ダ)にふくめることにする。

4.4.1. 形式面の比較

ノ(ダ)・ワケともに、前接する語には特に制限が見られないが、コピュラのダを後接するか否かで違いが見られる。表12に示すとおり、丁寧体の場合をのぞけば、ワケはコピュラをともなう例が見られない⁹⁾。

表12 ノ(ダ)・ワケとコピュラ

			ノ(ダ)	ワケ
普通体	コピュラなし	～ {ノ/ワケ}	81	54
	ダを後接	～ {ノ/ワケ} ダ	112	0
丁寧体	デスを後接	～ {ノ/ワケ} デス	28	15

このため、ノ(ダ)はノジャンイ・ノテナイ(否定:11例)、ノダロウ・ノデショウ(推量:8例)、ノナラ(条件:2例)、ノダツタラ(条件:2例)のように様々な形をとりうるが、ワケはそのような形が見られない。丁寧体でデスが後接した15例についても、すべてが「ワケデス」の形であり、ノ(ダ)のようなさまざまな語形はない。

また、表13のとおり、ノ(ダ)は従属文内にも生起し、主文末に生起するときも平叙/疑問の別を問わないが、ワケは平叙文の文末にしか生起した例が見られない。

表 13 ノ（ダ）・ワケの出現する統語的環境

		ノ（ダ）	ワケ
主文末	平叙文末	104	69
	疑問文末	72	0
従属文内		45	0

なお、ウチナーヤマトウグチについては、永田（1996:71）が「どこへ行くわけ」という疑問文の例を報告している。平叙文のみで使用されるというのは、移住地のワケにかぎった特徴かもしれない。

以上、形式面の特徴をまとめると、コピュラをともないうるノ（ダ）には様々な語形が見られ、統語的にも様々な環境であられるのに対し、ワケは①コピュラのダをとまわらない、②平叙文の文末にのみ生起するという点で特徴的である。

4.4.2. 意味・機能面の比較

以下では、形式面の特徴をふまえ、平叙文の文末に生じた場合を中心に、ノ（ダ）とワケがどのように使い分けられているか、意味・機能の面から考察を試みる。

まず、聞き手に対する説明ではなく、事態を把握するような場合、つまりいわゆる「対事的」（野田1997）な用法では、ノ（ダ）のみがあらわれ、ワケの用例は見られない。例えば、相手の発話を受けてその場で認識や納得をする場合にはノ（ダ）のみがあらわれる。

(25) (次の金曜日の野球の試合が「大会」なのかどうかJが尋ねている)

J: ふーん、大会じゃないの? (K: この…ん?) 大会じゃないの?

K: じゃない。(J: あ、そうなの…) こっちまたやるとか、張り切ってたよ、あれ。

金曜日? (J: なーん…) やりたいやりたい… [3世]

また、心内発話の引用でもノ（ダ）のみがあらわれる。

(26) A: (前略) ほら日本から考えると50町歩という土地は大きいでしょ? (森: そ

うですねー。はい) (仲: ち…) 農家にしてね。だから50町歩の主になるん

だっていう意気込みでやってきたんだけど、(後略) [1世成人]

ただし、談話の性格上、独話的な性格の強い「対事的」用法のあらわれる文脈自体が少ないことは考慮すべきではある。

一方、いわゆる「対人的」な用法ではノ（ダ）のほかにワケが用いられる。

(27) (街で事故を起こし、調査場所にオートバイでは来られなかったという話題)

E: オートバイでは来ねえもん。オートバイまだ街にあるんだぜ、おま。〔2世〕

(28) A: (前略) それがもう、米は、雨がないと、なんでしょ。乾燥期が長いと。(工:
んーんー) (森: はい) だから今度は、乾燥でも出来る綿ということに転換
したわけです。(後略) 〔1世成人〕

上は、前の文脈に関連した帰結関係の説明をノ(ダ)あるいはワケによってマークしている例である(「オートバイでは来ない」—「オートバイは街にあるのだ」、「乾燥期が長い」—「(作物を) 転換したわけです」)。しかし、前文脈との関連づけが薄くても使用される例が見られる。(29)の場合、「だいたい」といって話題を転換した直後に「おもしろいのよ」があらわれており、(30)の場合も時間軸に沿って話を展開しているだけで「言ったわけ」とその前文脈の間に特別な帰結関係は想定できない。

(29) (農業と風の話)

G: だから今日、今日、たぶん夕方夜で止まって、あ一朝方じゃないかね、
sur 《南風》、ん、変わるんなら朝方。(B: うん) だいたいさ、おもしろいのよ、
変わるのはさ、10時あとから変わりやすいよ。(B: うーん) この前もな、あれ?
と思ったら。 〔2世〕

(30) (近所の若者がCの車の中で酔って吐いた話)

C: 何があったか。ミエーッチ 《まったくもう (スペイン語の感動詞だが、ボ
リビアの平野部の方言のため、正式なつづりは不明)》 くーっさくて、一週
間ぐらいくさかったよ。(D: {笑い}) で、豊年祭に来てから、(D: んー) 「こ
の前はすみませんでした」 ンリチ… 《って言って…》 {笑い}

D: {笑い} 覚えてた。ちゃんと。

C: {笑い} 「あんたがやったのか。臭かったよ」 って、yo 《私》、言ったわけさ。
「すみません」 って、って言って、あの、謝りよったけどさ。 〔1世子供〕

横田(2001)などが述べるように、このような文脈でのワケの使用は標準語の特に書きこ
とばでは派生的なものとしてされるが、移住地のワケはむしろこのような用法での使用が多
く、本節冒頭で挙げた(24)の例のように「語り」の文脈で頻用される傾向にある。

このようなワケの性格は、発話ターンの中で生起する位置にもあらわれている。下の表
は、ノ(ダ)およびワケを文末に持つ発話について、ターンのどの位置であられたかを
まとめた表だが、ターンの冒頭ではノ(ダ)の使用が圧倒的に多く、ワケが使用されるの

はターンをとってから2つ目以降の発話にかたよる。

表 14 ノ (ダ)・ワケの出現環境

	ノ (ダ)	ワケ
ターンの冒頭	42	10
ターンをとって2つ目の発話以降	43	59

引用文中の例は集計からのぞいている。

表14は単に傾向を示すものにすぎないが、出現環境が制限されないノ (ダ) に対し、ワケはターンをとってからあとの「語り」に入った場面であらわれやすいのではないかということが示唆されており、今後さらに精密な分析を進めていきたい。

4.5. シテカラ

標準語では、従属文の述語がシテカラの形をとる場合、従属文で述べられる事態と主文で述べられる事態との間にある「先行-後続」という時間関係が表される。しかし、オキナワ移住地の談話データには、時間関係を表さない（時間関係のみを表すわけではない）場合にもシテカラが用いられる例があった。本節では、そのようなシテカラの用法について取り上げる。

(a) 時間関係を表すもの

まず、標準語同様に「先行-後続」という時間関係を表す例として (31) (32) のようなものがある。

(31) C: 車で行ったら、ほら飲まされないうって分かるから、(D: んー) そのつもりで行ってるんだよ。(D: んー) で、12時んなってから帰ってくるんだよ、車が。
(D: ah si 《ああ、はい》) [1 世子供]

(32) D: 「ご飯よー」って言っても、ご飯起きてきて、食べてから、また寝に、寝に行くわけさ。(C: んー) 「アギジャビヨイ ヒャー《まったくもう (感動詞)》、ヤナワラバー《悪ガキども》」って。 [1 世子供]

(b) 因果関係というふくみを表すもの

一方、以下に述べるように、時間関係だけを表すのではない用例がある。標準語ならシテが使われるような文脈でシテカラが用いられている。

例えば、次の (33) の例は、「先行-後続」の時間関係というよりは、因果関係に近い

意味を表しているようである。

- (33) D: ハーン 《はー (感動詞)》、6時に帰ってきてたよ。朝、朝帰りしてふたりで
 来てるわけさ。(C: んー) で、「人名」がすぐ、あの、車の裏で、オーオー
してから 《吐いて (オーオーは吐く様子の擬態語)》、(C: あー) くっさい【臭
 い】わけさ。(C: {笑い}) [1 世子供]

次の (34) では、従属文の述語は「ワージワジー 《むかむか》する」という状態性のものである。標準語の場合、このような状態性の動詞が「シテカラ」の形をとることは基本的にない。この例も上の (33) と同様、従属文と主文の間に因果関係が読みとれる。

- (34) (息子たちが、「先生」に呼ばれてワニ狩りに借り出された話)
 D: ワージワジー 《むかむか》してから、あの先生よ「なにー【何】、あの先生はー」って言ったわけさ。そしてから、「すいません。すいません」って言う… [1 世子供]

なお、高江州 (1994) によると、ウチナーヤマトウグチでは、「してからに」「してから」の2つの形が用いられるとされているが、今回のデータでは「してからに」という例はなかった。

4.6. 各言語項目に関する分析のまとめ

この4節では、移住地の日本語を特徴づける具体的な言語項目を取り上げ、分析を試みた。大づかみな素描を試みた3節では、単に「日本語」として提示したが、本節で議論したとおり、移住地の「日本語」は、標準的な日本語とは性格を異にしている。

具体的にいうと、伝統的な沖縄方言と標準語や九州方言等との接触により生まれたウチナーヤマトウグチと似た性格が観察される。しかし、ウチナーヤマトウグチに特徴的な目撃性のシヨッタ (4.1 節)、能力可能のシキレル (4.2 節)、否定のセン (4.3 節) などの形式は、使用頻度が必ずしも高くなく、標準語形式との併用がなされている。本文字化資料からの分析のみをもって結論づけることはできないが、項目によっては、ウチナーヤマトウグチ的な特徴を示しつつも、それよりいくぶん標準語に近い様相を示すものと考えられる。ただし、そのような考察は、ウチナーヤマトウグチの体系的記述の深まりをも待ちつつ、今後、さらに追求していくべきことと考える。

5. おわりに

本稿ではボリビアのオキナワ移住地における言語接触状況について、その一端を記述した。当地では、沖縄方言の使用がほぼ1世にかぎられ、2世以下ではスペイン語の使用が増える一方で、現在のところ、日本語は各世代を通じて使用されている（3節）。ただし、その「日本語」は標準的な日本語とは異なる特徴を見せており、ウチナーヤマトウグチとの共通性が認められる。（4節）

本稿ではボリビアのオキナワ移住地における事例を扱ったが、1節で述べたとおり、これに先立って、ブラジルサンパウロの沖縄系移民コミュニティであるビラカロンにおいても談話データを採集している。こちらは沖縄方言談話の文字化を中心としておこなっており、日本語談話の文字化は中途の段階である。今後、ビラカロンにおける談話の文字化を進めることによって、戦前移民から構成されるビラカロンの日本語との比較対照をおこなっていきたいと考えている。

ボリビアのオキナワ移住地では3世でも日本語が維持されているが、同じ沖縄系移民であっても、戦前移民が中心の都市型コミュニティであるサンパウロのビラカロンでは、3世の段階でポルトガル語へのモノリンガル化が進んでおり、日本語の使用が極端に少なくなっている。今後、戦後移民から構成されるボリビアのオキナワ移住地における日本語の使用がどう変化していこうとしているかについて、さらに総合的な調査をおこなう必要があると思われる。

付記

本研究は、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究拠点」のリーサーチフォーカス「言語接触とコンフリクト」の一環である。本稿の記述は、本文および注で名前を挙げた各共同研究者を中心におこなった調査をもとにしている。執筆にあたっては、白岩が1・2.1・3.1・4.4・4.6・5節を、王子田が3.2・4.2・4.5節を、森田が2.2・2.3・4.1・4.3節を分担して書いたのちに、全員で話し合いをしつつ、白岩と工藤が中心となってまとめたものである。

また、調査にあたっては、オキナワ日本ボリビア協会の方々をはじめとして、移住地の方々に多大なるご協力を賜った。記して謝意を表する。

注

- 1) 移住地で「方言」として認識されていることをふまえ、本稿では「琉球語」ではなく「沖縄方言」という用語を用いる。
- 2) 録音には、本稿の筆者である工藤真由美・森田耕平のほか、連携研究者として中東靖恵（岡山大学）・仲間恵子（琉球大学）、協力者として青木由香（大阪大学大学院修了生）があたった。

- 3) フォローアップは2009年3月11日～27日におこなった。科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「現代諸方言に見る推量形式の用法変化－〈認識〉から〈伝達〉へ－」（代表者・白岩広行）による研究の一環としてのもの。移住地の推量形式を中心とした論考としては、別稿を用意する予定。
- 4) この沖縄方言中心の談話は、4節での分析の対象とはしていないため、表3には示していない。
- 5) シトル、シテオルの例を下に挙げる。
 (35) A：こっちでもそういう傾向があるんですけど、（森：はい）とにかくあの当時一、軍、作業に行って、そ、今さっき話、し、したように、（工：んー）米人の軍属がですねー、わずかな、あー、いい給料もらっとるのに、こっちは向こう以上の仕事してあって、（工：んー）十分の一の給料も、しかももらえないと。 [1世成人]
- 6) ただし、おなじくウチナーヤマトウグチを記述した永田（1996:66）では、五段動詞の状況可能で「泳げる」という可能動詞の形が報告されている。
- 7) 可能形式の用例数をカウントすると表15のようになる。

表15 談話データに見られた可能形式の用例数（カッコ内は異なり語数）

	五段動詞	一段動詞	カ変動詞	サ変動詞
可能動詞（五段）	39	9	1	
ら抜き可能形式（五段以外）	(17)	(3)	(1)	0
～レル・ラレルによる可能形式	0	0	0	0
(～) デキルの形	－	－	－	33 (6)
シキレル*	4 (3)	0	0	0

*実例としては否定のシキレン・シキレナイの形しか見られない

- 8) なお、接触状況下でシナイとセンが併用される現象については、西日本出身者が一定数以上移住した旧植民地である、旧南洋群島（渋谷1997）、台湾（簡2003）、韓国（黄2008）の日本語に関する記述でも見られる。これらの場合、どの地点でも、シナイが中心的に用いられる一方で、五段動詞にかぎってセンの使用が認められる傾向にある。また、標準語との接触状況下にある関西若年層方言でも、～ンの使用頻度が一段動詞で極端に低いことが指摘されている（～ヘン・～ナイの頻度が高い：高木1999）。それぞれ接触の状況はまったく異なるものだが、ボリビアのオキナワ移住地における本事例も、これに似た傾向を示すということを、付記しておく。
- 9) 高江洲（1994）では、名詞述語への接続で「学生だわけ」のようにコピュラのダ（の終止・非過去の形）がワケの前に生起する例が報告されているが、本談話資料では名詞述語にワケの接続した例が見られず、その確認はできなかった。ただし、形容動詞では「大変なわけ」という例が1例のみ見られる。

参考文献

- 沖縄ボリビア協会（2004）『希望の大地——ボリビアに期待と夢を—— コロニア沖縄入植50周年記念ガイドブック』沖縄ボリビア協会
- 糟谷知香江（1999）「日系移住地における学校教育の展開—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」『東北文化研究室紀要』40、東北大学文学部東北文化研究室
- 簡月真（2003）「台湾に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」簡月真・渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相（2）－台湾－』大阪学院大学情報学部（科学研究費補助金「特定領域研究『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』」成果報告書）

- 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房
- 国本伊代（1999）「日本人のボリビア初期移民に関する一考察」『移民研究年報』6、日本移民学会
- コロニア・オキナワ入植40周年記念誌編集委員会編（1995）『うるまからの出発（たびだち）——コロニア・オキナワ入植40周年記念誌——』オキナワ日本ボリビア協会
- コロニア・オキナワ入植50周年記念誌編集委員会編（2005）『コロニア・オキナワ入植50周年記念誌 ボリビアの大地に生きる沖縄移民』オキナワ日本ボリビア協会
- 渋谷勝巳（1997）「旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」『阪大日本語研究』9
- 白岩広行（2008）「南米沖縄系移民の言語生活——日本語・沖縄方言・現地語：3言語接触下での暮らし」『国際シンポジウム 移動とアイデンティティ——コンフリクトと新たな地平（Migration and Identities: Conflict and the New Horizon）要旨集』大阪大学大学院人間科学研究科（グローバルCOE「コンフリクトの人文学」）
- 高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトゥグチ——その音声、文法、語彙について——」『那覇の方言 那覇市方言記録保存調査（沖縄言語研究センター研究報告3）』沖縄言語研究センター
- （2004）「ウチナーヤマトゥグチ —動詞のアスペクト・テンス・ムード—」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』ひつじ書房
- 高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて—談話から見た使用実態—」『現代日本語研究』6、大阪大学文学部日本語学講座
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味2』くろしお出版
- 東北大学文学部心理学研究室編（1998）『南米ボリビアのオキナワ村 移民の社会心理学的研究 中間報告書』東北大学文学部心理学研究室
- （2000）『南米ボリビアのオキナワ移住地出身者の日本適応に関する社会心理学的研究』東北大学文学部心理学研究室（科学研究費補助金「南米ボリビアのオキナワ移住地出身者の日本適応に関する社会心理学的研究」成果報告書）
- 永田高志（1996）『地域語の生態シリーズ 琉球で生まれた共通語——琉球』おうふう
- 野田春美（1997）『日本語研究叢書9 「の（だ）」の機能』くろしお出版
- （2002）「第7章 説明のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 黄永熙（2008）「韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持」『阪大日本語研究』20
- ボリビア日本人100周年誌編集委員会編（2000）『ボリビアに生きる 日本人移住100周年誌』ボリビア日系協会連合会
- 森幸一・大橋英寿（1996）「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」『東北文化研究室紀要』37、東北大学文学部日本文化研究所
- 横田淳子（2001）「文末表現「わけだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』